



平河文庫

全

新

中村俊定文庫
文庫 18
259



夜の夢の明くらん高帆の梅花
 平河社系之屋
 寄のそ縁く後さむ先の花
 素例服之吹
 今



元文六辛酉



歳旦



河津の松竹の連なり花のま 四時店 紀造

平河社系之屋

寄のそ縁く後さむ先の花 今

素例服之吹

夜の夢の明くらん高帆の梅花 柳東

平河社系之屋 紀造

寄のそ縁く後さむ先の花 今

反くり
世の中を忘れて
松茸所
柄を
南
名
き
道
人
伏
女
田

紀
龜
葉
茶
葉
市
修
紀
水
田

むら
夕
朝
亦
立
口
押
景

水
中
面
谷
川
叔
上
岡
平

聖書

山をよもばさるる日に行先
遊舞いさふ神くし松歌
考の心月おハ茶くし深し

遊舞
紀造
治長

すししと石も流波も明の春
つらつら花のさくうしる
さうさひも空費うしけは流きて

治長
紀造
新舟

日しよ旭とくさむらめ春
飛の尾と雲さる水の蓋
土雷く出れん雄守も歌よて

新舟
紀造
桂庵

神垣く一ハむらめ花のま
勢く鳥帽子霞たり月
舞着もの雀の声かけけそ

桂庵
紀造
貞富

柏のさ亦一白心むらめ春
初年舞くしお曲る藪
舞のく羽折の裾ハ舞出して

終松
万谷
五雲

の朝まの定とらくし梅花
さく舞の反故の舞る凡中の尾
海山ハ一舞くし

五之
舞松

画くふ右は南さびゆの巻
五つし
萬松

いさかしく障子明りたる川霞
貞五
紀造
葦園

其二

裏むし梅の花は庭さきりり
田社
石も洗くそ庭も正月
市至
あしを解の碓さしとらむ
茶外

おるわるくおけてとむゆの花
茶外
井植はけけ書とらも井
見えき
存の子は利口う勢く出く
義水

むろく香の徳と宿のみつけぬ
義水
橋りるあしりたるはまき
杜谷
二の碧りとち候も浪の音かして
波中

梅の影を白くする月夜
舟漕く道と菅草
百子の影も梅子は花にて
羊角

菅草の影も花も梅の花
梅も崩れ守やぬりる鳥
長廊下たるも春風に吹立つ
羊角
水口
赤川

切なるの春も花も梅の花
朝日うつりの梅子降る雪
梅の花の影も梅子は花にて
赤川
菅草
花口

四季長子の男ありて

梅香の初なる花のこゝろ
春の影も梅子は花にて
朝霞
花口
菅草

むらのこゝろ葉の影も二面
唐土の影も梅子は花にて
口を分るも梅子は花にて
菅草
赤川
花口

梅香の影も梅子は花にて
春の影も梅子は花にて
菅草
赤川
花口

梅咲ぬいふも白蛇人の歌
去年のすきみの牛房後正
と朝半の東風も扇舟をまかせ
和香
田社
造言

くさむの息吹け川梅の雪
まはやくらりもつる。梅幅
畑もちも茶鴉勝のすうりまて
造言
茶外
和香

一花落も自を咽ぬむの
幕のくじりた園の戸のま
白鳥のゆゑ人ももろくわく
和香
義水
兼戸

園と出て月のみえり梅花
木柱のけうらさやの白くじ
とよの東風の感はらひきく
兼戸
教中
香つ

明け晴てあそ相もよむの花
あちしすこの千尋の嵐
南側残の雪を氷くく舞
香つ
半与
実菜

咲梅り焼茶のこころ影を傷
まは泉のあまふかほ
十三日宅この舟舟際連て
実菜
素川
和香

門明て梅も雨くさ人こも
茶如くまきる水の夜
さか娘の朝やううう梅姫と
水田

柳ううおひうううさ
そのうもむる母共うと弾う
巻きたるま謙とふたうう
水田

表白の表てううう梅と分
丁と此走てううううう
袖几中衣柳の表ううう
水田

門松うううも出命のうう
水も若うううう川
表の追はの表ううう
水田

うううの室ううう
ううううううう
桃吉良格も維ううう
水田

其次

万葉の旅麻子むむし梅の家
こころ能も伊達な正月
大凡中も麻子のこころむむして
紀彦 口流 逸軍

あつしつし身編し書らむあの花
菽うし米の梅うしむむす
あの花の細いのもうしむむす
秋甫改 媛之 紀彦 未始

あつしつし身編し書らむあの花
菽うし米の梅うしむむす
あの花の細いのもうしむむす
紀彦 未始

えりら枝く扇りむむあの花
きりりしあつしつし上下
あつしつしあつしつし
富章 紀彦 逸人

あつしつしあつしつしあつしつし
あつしつしあつしつしあつしつし
あつしつしあつしつしあつしつし
逸月 紀彦 逸舍

あつしつしあつしつしあつしつし
あつしつしあつしつしあつしつし
あつしつしあつしつしあつしつし
紀彦 羽上 逸人

雪あつて一八梅のつらふ
名もつらふつらふ。後集下
猪の玄喉常月人くひんて

逸軍
紀梁
逸臣

この子と母あつてうさぎ梅
花
まの雪を雪の雪を粉と振て

口法
耳多
紀志

わろけと梅の門新々天は星
後集下
けのつらふ目お母さよふまの事

去格
逸人
半里

梅香の先吹まゆるさあ方
子日帰りの依りあ松
梅のつらふとあ都母肩と

紀事
紀事
羽上

神のつらふとあ初び先あ春
岩戸へ三寸の思ふえ日
幸あつてあ八書中はとあ

逸人
素山
紀梁

く手明とあ五のつらふとあ梅の花
くつらふ吹出心飾松の戸
國両もあつてあ長は日とあ

逸人
富章
不帽

廣部子目ちる系梅の月夜小
まのしき子降る水川
於己年をさる様もつれ出さず

紀史
考月
素山

し手取の歌のよきよむ此の冠
雜煮のくくの思ふもさる浪
維子の夢回に都もさる直く

紀系
半白
紀本

後心初の押信も白くびらの冠
半面くすむ衝立の 靴
版蛸もやうハ朱マ奪りゆじ

紀史
紀莫
紀史

去年も残りく梅の笑ひ友
下戸も一門ハ通る梳版
俣徳の山猫の尻り意も竹

来雨
隨長
口外

神垣や素も後子むりぬ花
恵方糸のこまこま 十り合
考追のつらう所をさるて

不惴
隨五
素格

嘘の仕舞ハ白し 子も免はるか
さくくくくく 反格のみ
形も素ハ蛙の足の切りて

羽上
紀本
考月

鳥帽子着て梅をくくくけり
今屏より照る春の明切の
遊畜牛以千の沖不托た出て

諸しの不浄をくくく梅の
社江遙くく新めたる山

傘持の遙に目御再括賦りて

梅うくく南をくくく江江所
芥振すくく田捨の 菴
着更衣女之六里の旅出て

丁更の草のめく梅くくの時
翁ハいろはよくくくく去
雛の如く火燈のそく昇くく

浮及くくくくく先の白く
湯立の冬くく浪の初花
くく時ハ月も腫の乃中着て

紀梁

葉吾

馬幸

遊也

遊電

来雨

紀象

遊会

紀雙

半里

不惴

紀貞

遊人

紀念

紀京

平河文庫引付

元旦

松林のとももの心き紫門の松

申子虎

醒て暮る人も千もやまの帝

雞旦

相けの落り伸てく朝の春

梅之吟

咲かた子忍返しも色うぬ

腫目夜のうけを弱下結

来り終る庭も丁の連なりて

夏目

子規

全

秋菊

礎月

全

菊悠

紀造

奉納梅之吟

種ま樹みさかたもすか惠神の梅

山のうんげもまるとかゆの目

つゆも付く弱の足並長末美

正卯

庭をのこもりありし明のま

出入の者も千代ま門松

山更に雪霞の衣着兼しそ

歳肇

つゆもけし庭て動しむちの花

射りら騎りたん雪し二筋

人のほ山やもあひらもれ美

白翁

口仍

一口

中野

紀造

万母

紀造

杜谷

社印毒

朝新さまたるはむかしの宮所

白木

神の清くくく心まゆ牙

紅梅

時赤ハ雪おとらるる解さ申

万母

廣末梅

平河の数年梅ははる石

長井公

圓至

中野のまきくくまの枝振

左

里ハ仁人ハ震の字母連申

左

口

平河のむかひくくくく春

中巻

口

同く其内くくくく宮の梅

百爾

破府綿塚くくくくく

百川親

沼津くくく一番難くくく代のま

海吞

三元

破テらや高ゆもむくく男山

万葉止

むかひ咲て茶屋も二日の白ひ

之

元且

古来くく似もやぬむかひのうた

かき屋

壽山

高

標のまきくく塚上きり玉のま

青柳

白泉

むかひ咲やのくくく神一息

其壽

法系

け神のまきくく厚くくむかひの冬

松齡

紀夏

白梅の持のすくも、日のけり
花梅の持のたれも、ころも

子尾

玉のたのしきと、雪のそとね

歳晚

この世の人倫と、あの中をくはさ
凡人も、年のはらりと、歳暮外
あかる言ふと、年の歳暮ふ
ひも、たれも、年の暮も、催
く、ささ、たの、巨、さ、の、か
く、の、た、の、笑、の、日、向、山

紀光
拍子

白翁

あ香
貞富
挂竜
法在
催放
水波

ささたけ、何とて、あつて
あつて、あつて、あつて、あつて

嗚くと、門の影、むく、は、り、ま
と、の、破、の、う、矢、白、の、朝、糸
く、け、り、の、朝、の、ほ、と、の、糸、て
な、の、め、す、の、糸、を、上、て、あ、つ、て
松、の、ま、の、後、の、糸、を、一、目、の、暈
来、て、丁、の、糸、の、横、の、糸、を、人、の、糸、を
衣、の、糸、を、糸、を、糸、を、糸、を、糸、を
お、い、も、女、と、く、糸、を、糸、を、糸、を
眼、も、恒、ハ、怖、と、く、糸、を、糸、を、糸、を
糸、を、糸、を、糸、を、糸、を、糸、を

李冠
紀遠
餅人
紀光
素直
紀碩
廿三交
万母
花邑
景袖

煤稀之古のそまもあはせり
地々く有るさかハ口井戸
寄合は等々二階とて實
毛戸ん流の汐汰と踊る
茶の癖や人の津は二月の所
何と抄とさかせん象
文庫山花うた申き幕屋
心より戻さそめり稲州
すけらさ日懐きくたさる波心
情いそそとそとそとそと
節りして舞りの遠く神仏
系舟居倦く大坂おも伝

梅北
花去
遺十
紀釋
遺彦
遺時
和馬
紀芳
紀碩
遺時
花去
花邑

鳴りさそ鳴りぬ糸子を切りて
何川とそそそとそとそと
下のそ何のそあるはそとそと
夫とそそとそとそとそと
編橋のそあな廟へ押しそと
夜の月入るはあそれかん音
常きそとそとそとそとそと
患よりそとそとそとそと
川とそとそとそとそとそと
塩とそとそとそとそとそと
吸の骨ありそとそとそと
梅と細子をそとそとそと

葉純
梅北
紀釋
李冠
万母
は交
紀芳
去星
李冠
和馬
紀芳
遺彦

奇年の楯子成るる冬はく架 万母
つらん盤てもちりか 燗 遣十

家序

は神とかが寺及びむらの花と云ふなり
うとい陽多島の瑞籬交ハ平海の社記

沖神と君とのさまむ先の冬 乙柳
平八甫の又ら七旬の母なり幸ありて

嬰兒ののちくま

白合じて咲く人セリり福壽州 虚山

まら申のちちとまら寸木の花 全

系は人へ着いり火りり木のふか 梶原

初元とくつと用く福壽州 近巴

去奥

水河等と園と暮るる桂う取 探厄

む免おて二番海と床と花 其壽

福壽と仁徳とある福農 浪 有里

む火り者のとらくまらと毛廊下 東水

むらう者らむられして文とり 光經

徳河りの梅樹二本神と君 ぬ竜

神海と者もりの垣の梅花 終至

者とや一は神垣のむらの花 紀玉

物いゝ東とくまら明の鏡 中水

うんまは是もくまらむらの冬 喬河

よ下の州外と初湯うか 佳飯

改曆

神垣の口外清くむ火の籠
人集くつく立座の籠を
日のともはまうくまの色はて

良節

神うれこむ火者死る初行の
柄杓を流る胎事いり
持の赤衣展むくみく時をたて

改正

嘗もいりてむひるくつら心梅
腫着初ける二り三月月
好ぬの鳥すも来ふ古きわて

紀鶴

紀造

紀双

紀双

紀造

紀鶴

言貴

紀造

例に

初陽

除雪も梅のすくくは花の紋
く代の修を道と門のくく
桂留も蛙のまは暈もと着て

夏正

物喰もまの来かきくくこの物
嘉例もくくくくもくく玉
大鳥毛鹿の園とくく出とて

阪月

初元も扇うき来んむむの物
くくもくくも編いさむま物
炎連もくくくくくくくく

遺保

紀子

紀雙

民之

業只

民之

業只

民之

業只

年既 三十一の暮の暮と遠

先は山崎の皇子の朝の春
山も花は海も春
つらね抱へ肩けおと中と昔を

上陽

着つかけし裾拂ふ朝の暮
る上のつむこはるやうと葉
積みの杖おとしく巻きて

五子法

おとさきと枝もながくさぬ門を
おもひもさきも皆むつと月
百歩のおとけも古に絶え

遊核

春園

遊核

春園

遊核

春園

春曉

春子

春曉

東君

花を草の山もふ枝こいの飲
人も春も枝のこ子 廣
昔ふ神代のそむとも明けて

蒼天

浪連漣の浅目しや日のけり
東風吹散る水の申つり系
其弱も一と手振の目と先を

青帝

しきのしよ位も春もさる神の枝
あまのの道はとれな 魁
又春ははまをちり影ありを

春子

春曉

春子

柳川

連枝

柳川

連枝

柳川

春枝

陽書

雜事をも所慶と流し目く自
美しく送る千代のと玉
寶珠の綱より共の集つと

如月
柳川
如月

人日

七州の囃子はほこし雜の交
うさ孫上うさ和田のゆ玉
ふさう八様不霞のうさひま

扇阿
素心
紀道

大簇

甲ふちむさや木了る星月夜
腫痛しゆく弱め終る
暖い形しう強を時とゆて

阿白
扇阿
素心

人日

大さのる石を飛く足葉
たらしと核のうさみ州
山月を維よめさのむけて

雨夕
紀道
川舟

其二

又葉指見ぬと畠の明の表
うさひすはうさ留ちの谷
下地定長字なえを呼込て

二月樓
里先
紀道
霞山

其三

く拭く伝を道とんをるよか指
維子の帯しう山月の袖
すさうと解のうさこの海十を

霞山
紀道
鳥寂

其四

振袖とるるあつするいふ葉搦
誰うのりもと格よ書始
うのいふ長果の格所うし

其五

小娘の袖小色一いつかう分
ひまやまかかむむの花笠
三日月舟よふのこの烟突て

其六

ひまの妻はははは行一いつか
格きりりしと園の障日
伸ス師よ子たも肩ては切て

川舟

紀造

貞吉

貞吉

紀造

雨夕

鳥衣

紀造

貞吉

其七

神尾の妻ははは行一いつか
格きりりしと園の障日
厚氷水果しりもとけりて

其八

神うたの難の妻ははは行一いつか
く山梨のむむと上客所廣う分
く山梨のむむと上客所廣う分
東ううと上客所廣う分
廣あまむむの目も目八分

其九

とあちう一葉紙入て待むめの茶

紀造
紀造
紀造

夢行

和音

雨火

雨船

又舟

且調

大呂

まのともも惜しむるのれ
吉原も花ちる里ことしのれ
鶴の塩ゆく度まゝの奥

乾什
横川
拾翠

歳開

月日の時の最のやうのれ
俯てふもゆきまもとの言
りし年の風とゆき分秋際
首垂れぬ母とまねて惜む
掃捨垢油くまの川くまの書
人よりも先のまねる眉稜のほ
病ぬすむ何れこし日の月め

蚕團
標危
冬川
水月
自徑
土川
紀菴

聖言 太

トリナキテ鳴るは冬山代のま
くくけのまきくくむ梅のむ
まのの候よてゆきまのれ
路の松葉と流 太

倉水
美柳
美明

符もさしきくくくか初日ふ
梅のうけと用る神魚面
むれんや高倉原な松のま
元日ついでるまの恵めまな夜
切のゆきむれな用る社壇
とそくやすむれぬのまの
定まらぬまの魁し定まの物

舟水
水石
素帆
呼来
一秀
和木
淨園

終り

耳うきの及らんともまはし
晦日と花くぬきも同一面
糞糞のものはくたつて氷
縁とをわらうと縁ゆき
茶搦を師走の月のひかり
分別の袋はしんやしのれ
むかひあがる障子ひらき

白家
有同
帷之
富章
冠夕
逆雅
未定

来しまはしと清き一年の一夜
年もたると一夜と花の志は山
世の塵と凡うと啼く大晦日

万葉
長月
田社

一打

門松ハ様子歳のあはれ
ねしうなまはらうと極よひあはれ
る柄杓を以ての破は浸さる
少川さた羽打似合糸繫
字教は清くさうと青の月
おしりて一尺の種為
獨り旅と新田は連まう
胸の燈の晴る富士の根
いそとさうそわくとも名は
自心と包むものち吸吐
白ふよ所候ア一き舟と着

和歌

紀業
逸業
和方
有里
列子
逸業
紀業
初方
松家
列子

振方て聞く蟬の音あし
黄檗の葉さくはつき湯を立
粉の盆さるる笛の音
三月月の心つとく障る花の枝
霞もさく上る 古
ま直まこも海も伸る 几中
肉均し鳥の音あし

梅の吟

何れうさ梅の葉も神意
幣とれんまはこびの初日
神うねる朝やまはる梅の
てく下神のうくみこ梅の谷

有里
拾翠
幽泉
如方
列子
仁業
有里

花也
和方
借案
玉水

社説吟

正也とむ先のすまこ神の意
ま約の言まはる梅の
む火う香るまはる扇の
天も群ぬ満りまはる神の梅
む火暖る明てまはる梅の
吹付る神のめまはる梅の
梅香るもまはる明の
兄弟子のまはる梅の
定知るもまはる梅の
神垣の所もまはる梅の

梅の吟

英素
糸谷
素谷
千々
静々
川莫
祝角
夕角
啼子
隣谷

くまのまを待たしむらめ春
かきゆりしむらめ春の物
畔素
反畦

人日

七々々の拍子揃ふ町ぢんま
鯉庵改
匡廬

守も

勝子子そ女くくりとくの書
貞石

兼晩

茶搦の二つとむ。呼ま外
華各

漆鉢只並ぬくゆりしむらめ
梅子

居心の彩くまやるな煉拂
霞山

陰夜

皆負て准り勝なりしむらめ市
丹志

平河社政梅

白く梅く明く朝後め
梅雅
長毛く直方へ向く神の梅
梅兒

鶉日

むらめはけりりして男髪
糞く
かきゆりしむらめ玉の書
紀厚
貴子代り末き梅の恵り分
夏巴
紅梅の八きよ恵の咲き
之仁
風を吹くむらめ春よ者神書外
若急
むらめをむらめしむらめ思ひり
連志
むらめをむらめしむらめ思ひり
憐儀
菊の齒を磨き白くむらめ春
是時

去良

青柳のうき所くよの角く
むらさきの柳の葉の隙をよの

烟外
樓兩

案暮

蛤の川のうらやや〜〜中暗

百店

日

煉掃の隣ハ障てお〜〜る

巻石

解橋の影地しよの朝切け

揚水

そよひまよよ〜〜地蔵書か

口海

と浪のうきもゆる木の葉毛

雪子

除夜

福壽州す〜〜ぬさの地

海棠

去日

嘆ひ火の枝よつむじこまの香

左少

筆く〜〜とくける

不並

法人の心の清もぬぬ〜し

玉中

日

中火の香よ炎代旭の焚く〜し

左少

白く咲むらぬ〜〜る神を魚

玉中

白くは板の匂か〜〜る神を庫

不並

〜〜〜〜〜千里た〜〜むらぬ〜し

光雅

雜日

赤き〜〜の的〜〜るけ〜〜先

霞阿

七州よ柳子活〜〜る足袋履推

波爪

蘇州連

あ〜〜あこの厄よふら幸よせわハ

天神とあるの目かたえ梅の吹と四時唐をん

文庫よ加て毒全と行る

神清〜 空高も怪き梅の葉 乾唐主 首女

〜いふい富く代々のまゝに

凡中の糸一信のま守目かまて

魂のひの雅け〜地を 蘇州 梅の葉 首女

〜と〜とまの約互と 梅の葉 滄浪

〜と〜と此存の画とん 梅の葉 菊天

まのひと〜ま谷のまも 梅の葉 乃措

園の夜もゆりのまる 梅の葉 麦臥

唐土う原もせけ〜 梅の葉 胡牙

繩張の残る名り架 梅の葉 虚睡

追ふは行ひま〜 梅の葉 臥病

不意菊か振袖も是 梅の葉 子仙

〜ま〜と先照す 梅の葉 虚亦

官らる〜ふらふら花明と 蓮人

神田て〜のしとま果をた 病色

遠い月〜神号くあ〜けれりて 病月

人日

あ〜い〜若葉と〜るけ約と糸 山梁

山部音

網と袋除夜も神の神川初水
 大豆まじり思やまてこれ葉加減
 少の口ふ千鳥あてまのま
 幾いよめ月よあふさうし所
 出れしう空くくくまの音
 まふあつ松の下り木の傘
 むあふと一夜と花のあふ
 桜枝の神鏡あふれとの包
 唇と獲の垂る目の目移るま戸
 伝はるる種は勝る神の梅
 幸子よといはらう遠の梅花

波風 初水 東川 橘下 台亭 千流 玉剛 吹翠 春雨

山部音例

天の川まうくまの梅の心
 けり水母梅の香もりりとの物
 初空の雲も廣く一箇の
 むはら香ふ雲はあつ梅の網
 清粥 毎こころしんかめ元
 魁の目まえく雛かん廣小
 みる水の水のうくくけり
 神自志のむはらの勢ひマ初日
 鶴よ先つ并れしむら花のま
 香ふふれと桜まらむマ梅花
 にしししししししし神の梅

相系 嬖久 紀常 水月 自徑 純香 進旅 蒼子 ちか

えりむきあの吟

白く白く神も東へむく梅
むらうふはくもこうそ目と定
明くくく神武のやうに
塀にけり所又所とく

舟本
津山
巽在

雑旦

名よ白く夏も那波の梅の道
明後日日月も降り初日く那
招凌く小神もむつまむらめ
ぬとむる水と朝の水加減
之をく雲霞と富牛と朝の雲

今

辭分

嘯水
千所
其友
花菱

嘗もあよる登りし少く塀
む失く雲と芝賦く霞か
鳴枝く霧とくあけり梅花
あつらる文庫も梅も用梅
起く梅梅く迎ふ方朝の雲
て下皆むあめりくくく

嘯水
紅花
紅花
廣川
道之
細月

梅の吟

とも香も如光の影の神の梅
神梅母和く梅の白くふ
神の梅は梅の母の母の母
玉梅とそれ梅の梅の白く
く雲の白くくく光の花

露系
紫石
梅の
玉梅
香臭

つららちまをたはめかゝ水
むらさき花のまゝめの花
あんのつとあひまらりむらめ
神のこゝろ一葉のこゝろ

聖前

花堂
道十

天保用ひの文花うはまの
あまたあつちちも晴の人のあまの

まゝ

丹志

蝶々の舞へしとままつた
むらさき花のまゝめの花
あゝしとあひまらりむらめ
むらさき花のまゝめの花

睡珠

枕詞

花月

歳晚

籠梅の一夜しし一月の雲

々

鶴子の今をいゆらうの言
しらぬの夜を深もふらる

存義

印書

梅之吟

七層ふ錦むらさき花の
神社の夜明ハ白一葉の花
あけがのさゝあひまらりむらめ
二と一むらめの花
むらめの花
白紙とあひまらりむらめ

つら

くさ

い

き

二

郁如

幸さきとてはるる事也と云きの上
 先うけて暖良く山形むちの冬
 草葉の根無くむちのこころ
 神社の明りのまにむちの光
 ちよよ何れもしるし神の梅
 余のまこと山形ぬめむちの花
 くこのすも初音はけふ神の梅
 うそじする古事かきく梅の花
 弱女の顔もまるとむちのこころ
 下丹書さ端まのむちの言所
 咲花のまきと侍えとくこの
 じりり片り玉垣のむち

坂倉
 元千
 松竹
 庭木
 初音
 紅英
 白芝
 朝月
 智史
 是例
 歌子

水赤居歳言余

一口のくはく心捨ててと火喚り
 其侍定よ日本書記積
 ちれお先何所りも教く出て
 新ちりしめのさえしと音
 魚賣の残も水川くまの月
 けしおもくらの書紙く入
 とんちくは花の形え石の上
 丸ちくく一筆し落と突出
 州鞋を別し志の恒井は
 としりしつて及名とえとえ
 けり豆屋上下もあき花さうり

紀遠
 修程
 教中
 赤川
 半角
 教中
 赤川
 半角
 教中
 赤川
 市金

維子のさうり 熟くし 修 修
 八指もくひと 一 半 半
 衣の袖を 修 修
 さふ 女あし 修 修
 くこの 修 修
 夏 修 修
 月 修 修
 ろう 修 修
 る 修 修
 歌 修 修
 上 修 修

比 修 修
 其 修 修
 其 修 修
 其 修 修
 其 修 修
 其 修 修
 其 修 修
 其 修 修

何 修 修
 何 修 修
 何 修 修
 何 修 修

此の山に花はけく少くはむしりてくそ
りしはくしんこらるる空をたすま
ぬちの例のちるふ言あつてしは

此の夫のひも起すしは言及 修後

梅之吟

少くは日の影くく白し梅の花 錦を 花重
門松のまきき知今む夫の花 芝川
少くはをそくくくくくくくくくく 水巴
つるは夫の園と研とくく朝雨 又人
砂をくくくくくくくくくくくくく 備前
打勝てくくくくくくくくくくくく 喬江

朝日及び水上清くくくくくく 麓 景陽
騰きや草の林たんむら日夜 琴 曾祖
むはくくく井ふくくくくくく 四 種
後梅の神一垣くくくく朝日影 千里
よい響くく世くくく梅の花影 南園
雛旦
ふ代梅と羽と伸あり初霞 香瓢
なる年もやふくくくくく 去 後
名を強くくくくくく を 巴文
摺正の外めなきとくくく 柳 文

追加

朝日波む水上清くむらのそ路 藤原 宗陽
腫るや葉の林花むお月夜 翠々 曾調
む免峰の井あふ川里香の源年 四種
渡梅の神垣うら川朝日影 千里
よの雪と世にさや梅の林影 南園

雑旦

子代鶴と羽を伸あがり初霞 雪瓢
礼る年ものハロムー三ツの朝 素後
梅咲て雪舞あふお秋夕南 新席
日よお増す窓やうろ緋の花の春 本末

(以上 志田文庫本ニヨル補)

む先の吟

面白き幕のあふむむりの巻
あつかりと木の白む明の巻
ふいかりおむもつし梅の巻
まろむむる霞いむむの巻

冥者

凍中

笑家

汀水

友仁

口

さうし

とろしの中ふ服舞う梅の巻
さいりいとむ先のそとむ川巻

鴨川のふふ天晴し分梅の花
長刀と乳母小振らそむ初巻

く山目乳のちふ巻む巻く那
布人

赤雀

宗雨

豊由

松号

布人

梅の吟

藤玉川

ぬりしとろとろむむ梅の花
赤松も梅よ咲れそむりり

まのうえよまきり初巻の巻
平海のむ先もまきり初日

万歳のまむむりり初巻の巻
平川りり守るむ先の巻

あふかりりむむむまきり梅
社匠梅

む先りりもあふむりりむりり

あふむりりむりりむりり

あふむりりむりりむりり

あふむりりむりりむりり

あふむりりむりりむりり

あふむりりむりりむりり

あふむりりむりりむりり

あふむりりむりりむりり

あふむりりむりりむりり

あふむりりむりりむりり

あふむりりむりりむりり

あふむりりむりりむりり

あふむりりむりりむりり

社匠梅

神ノ此の松は古くより一ノ君の
まはしむる代にけりし

松吟

死にけりし山のじらと
止

急景

まは荒の尻るふきりて
寥和

口

まはまのまはしよ梢の松鳥
吏也

山下は松のやの青のかけ
まは

解花のまの申りの松
互来

松尾

洞魚

川の松のほもと岸の舟房
去月
とらまの松とて師走
松山
市もあすしちの松人若
長梢
花のまのまはしよ松柳
墨川
川の松の西側まはし
紀交
千艘の松も松とて松の皮
万教
修習松の松とて松の松
鳥川

鶯日

肩衣の領巾と松の門の松
系

武門の業の松の松の松
勢

松の松の松の松の松
松

三河の松の松の松の松
松

似城の長古さなりんさとの言 紀奴
下まんとりふりも現りくしとの言 雲花
くも雲の森光がりさ師走の 田枝
人並ふもそのかろるる看蕪中夜 杜殿
随くと富さく向ふ甲の表破府 青葩
所猪の周ふ其なむて甲とふゆかひの言
敷くくもも至くくもその言者り 羊群
火くく尾ハ蛇くくもその言者 片皮

大尾

うらまの法来のもの花の足 帯仁
甲のその例の通ふむ其の花 亀文

元文六年酉孟春

上野縣藤原系
壽板堂青鹿梓



かけろふに錢坐の煙結ふらん

老洲

反かへりたる日あたるの棒

我圃

海山ハ一雨正このとかみ

万谷

二の替り太鼓も浪の音あて

敬中

梅さきて……

敬中

春雨ハ諸目節をぬけて出て

和專

